

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■番外編「残された人々」

東京電力福島第一原発が立地し

原発事故で全町民が避難した大熊

町。突然の避難指示で着の身着のまま

の住民たちが町を後にしてから3

年半、今も全域が高い放射線量のた

め住み慣れた家に戻れない状態が続

いている。

東日本大震災の発生直後、大熊町

役場には第一原発がどれほど深刻な

状況に陥っているか詳しい情報が伝

わっていなかった。当時、企画調整

課長だった秋本圭吾は、運転中の3

基の原子炉がスラム(緊急停止)

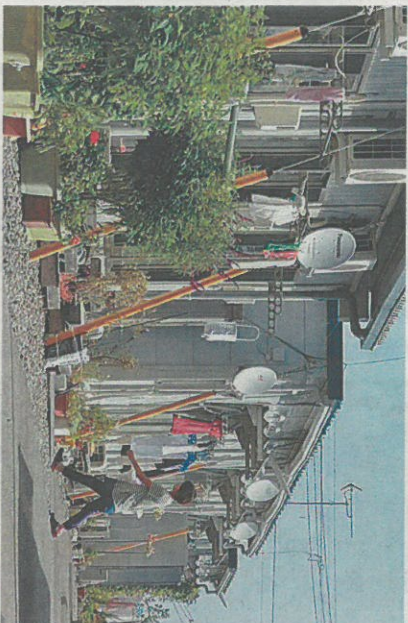
したとの東電からの情報に「止まり

させずれば大丈夫だ」と考えた。

しかし、その後、原子力災害対策

2

原発立地町の思い



大熊町の住民が避難生活を送る仮設住宅。9月27日、いわき市

「私たちの姿見て」

特別措置法15条(冷却機能喪失)に

該当する事態に進展、事故発生翌日

の2011年3月12日朝、町全体に

避難指示が出された。

何十台ものバスが避難所から住民

を乗せて次々と出発していった。自

秋本は言う。秋本は、事故を体験し

た町として何を伝えていくべきか渡

りかたど振り返る。事故前、原発

周辺地域の避難訓練が行われたこと

はあったが、町全域の避難訓練はし

たことがなかった。訓練とはいえ避

難の範囲を広げると、いざしに原

発事故への不安を覚えることになる

のではないかとの懸念からだった。

「原発は動いて当たり前、安全と

いう前提だった。最悪の想定はして

いなかった」と渡辺は悔やむ。

事故後、原子力規制委員会が発足

し、新たな規制基準が設けられた。

事故の際、町内にあった私立病院

では救助遅れや、長距離、長時間

に及ぶ避難の末に患者ら50人が死

した。原発を抱える他の自治体で避

難計画は十分なのか。

「人命第一で」という形で安全な

場所に住民を移動させるのが最大の

課題でしょう。もう悲劇を繰り返し

てほしくない」と渡辺は願っている。

大熊町の東部では、事故に伴う除

染で出た廃棄物の中間貯蔵施設建設

が進められることになった。町民約

一万一千人は今後の生活の見通しを

に電気を送るの続け、国を支えてきた

という自負がある。国策による原発

が事故を起こした今、被災した町を

国がどう扱っのか注視してほし

いという思いがある。

事故の際、町内にあった私立病院

では救助遅れや、長距離、長時間

に及ぶ避難の末に患者ら50人が死

した。原発を抱える他の自治体で避

難計画は十分なのか。

「人命第一で」という形で安全な

場所に住民を移動させるのが最大の

課題でしょう。もう悲劇を繰り返し

てほしくない」と渡辺は願っている。

大熊町の東部では、事故に伴う除

染で出た廃棄物の中間貯蔵施設建設

が進められることになった。町民約

一万一千人は今後の生活の見通しを

につけられないまま、不安な避難生活を送っている。

町には、約40年にわたって首都圏(敬称略。共同通信 小野田真実)